

＜今日の説教のポイント ルカによる福音書 6章 27-36節＞

1 今の世界を思うと、「敵を愛しなさい」は絵空事ではないのでは。

「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にきなさい」(27)。わけの分からない絵空事でしょうか。今の世界の状況やそれを生み出した指導者たちの言動を思うと、そうでない気もします。イエス様はどうしてこう言われたのでしょうか。この言葉の直前に語られたことに注目です。

2 根拠ある主張、敵を愛せよ — 今が全てでない生き方への転換。

「貧しい人々は、幸いである。…しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である」(20-26)と語られるイエス様は、「今が全て」と考えるのではなく（Iコリント 15:32）、「金持ちと貧しいラザロ」の例え（16:19-31）ではっきりと示されたように、神様が死の先に用意された世界（神の国と陰府）があることを考えておられます。それは同時に、私たちが今をどう生きるかにかかわって来ます。神様の目に適う生き方が大事になって来るからです。この時、イエス様が示された幸いと不幸の逆転思想や敵を愛せよの思想は、俄然、真実味を帯びて来ます。

3 憐れみ深い神様を知った時、それは現実味を帯びた生き方になる。

それでは、神様の目に適うことはどうしたら知ることができるのでしょうか。それは神様がどのようなお方であるかにかかってきます。神様はどのようなお方なのでしょう。イエス様は、「恩を知らない者にも悪人にも、情け深いと高き方」(35)、「憐れみ深い父」(36)とされています（マタイ 5:45 も参照）。そして、その憐れみ深さは他人事ではなく、私自身に深く関係していることを知るとき、全ては変わるのです。

4 「敵を愛しなさい」の敵とは、神様にとっての私のことである！

私たちは、私たちがなすべき倫理的内容として「敵を愛しなさい」を考えがちです。しかし、「敵」とは神様に対して背いて生きる（罪の原意）私たち自身であり、その私たちが神様が赦して下さった（愛して下さった）ことをまず考えるべきなのです（テモテ 1:15 のパウロの言葉に注目。ヨハネ 3:16 も参照）。神様の愛が自分に与えられたことを知って、敵を愛することに取り組むようになる時に、私たちの心の中にも、また、国と国との間にも初めて真の平和が訪れるのではないのでしょうか。聖書の福音を理解することと宣べ伝えることの大切さを思います。